

金沢の人形劇団トロワセットの新山結以さんからメモをご提供いただきました

八巻さんと語る会・概要(2024/03/12(火)金沢市役所第2庁舎にて)

- 国境なき劇団→劇団ではない。阪神淡路大震災後の演劇人の会、東日本大震災後の演劇人のグループ、熊本地震後の演劇人のグループが集まってできた団体
- 「方言のあるところに演劇がある」
- 10BOXは市民芸術村のいいとこどりをしたような施設
- ARCT(アルクト)…アートリバイバルコネクション東北

- 先が見えなくて、手掛かりが欲しい
- 阪神淡路大震災の時も演劇人が集まり、「自分たちに何ができるか？」を考えた
- 「震災は演劇を変えるか？」
- 演劇に何ができるか…今も答えはわからない。答えは1つではない

- 「何が欲しい？」→個人的な答えは「パン食べたい」「とんかつ食べたい」「コーヒーの香りを嗅ぎながら温かいコーヒーが飲みたい」…
- でも、それはみんなが望むものではない
- 「何ができるか一緒に考えましょう」と言って、支援者に帰ってもらう日々だった

- 外から見た家と中は違う。ガラスの破片、人形、泥のにおい…

- 今は来てくれた人の気持ちがわかる
- 根掘り葉掘り聞かない…
- 「何でも言ってね」とは言うものの…
 - そんなことを今までの人生で言われたことがない!
 - でも、今は「何でも言って!」

- 地震の後、電話できない…いつもやり取りしていたのに…
- 怖かった。「あの場所、七尾だったな…」
- 東日本大震災を経験したから、今は現地に赴ける
- 「お見舞い」の形がすっかり、しっくりくる。痛みを抱えている人のために…
 - ⇄御用聞き、「何でも言ってね」

- 「大丈夫？」と尋ねると、「うん、大丈夫」で終わってしまう
- →根掘り葉掘り聞けない。相手が話せる状態かどうかもわからないので、どこまで聞

いていいかわからない

- →「大丈夫?」を単品で使わない。「お家は大丈夫?」などのように…
- 被災者は「あんなことがあった」とは話してくれる
- 状況の話に留まり、その時どう思ったかは話さない
- …と言うか、「ない」。→言葉にできない。言葉をつかめない
⇔
- 話が始まると、とにかく「聴く」
- 「自分よりひどい思いをした人がいる」と思うから話せない
- 話し出せるようになると話してくれる。なかなか蛇口が開かないが、開くと後から後からあふれ出してくる
- その時はまるで「宝物をもらったような気持ち」
- …まるで詩人のよう
- 感性がひらかれる。美しいフレーズが出てきて、詩のように聞こえてくる
- この「詩」は、流れて消えてしまう…
- →こんな時に演劇人がいたらいいのに!!!
- いろんな所に演劇人がいればよかった…
- いさかいが起きる場面が多い
- →議論の場をつくったり、輪に入れていない人に声を掛けたりすることも、演劇人ならできるはず!
- その時の演劇人は演じる人ではなく…劇を完成させるために、議論を通して完成に向かう、前に進む力を持った人たち。この人たちが場を和らげてくれるはず!
- …それは、演劇人からしたら「え?そんなこと?」と思うようなことかもしれない…
- 能登の震災のラジオ報道と新聞をまとめたもの…
- 能登地震…最初は観測点の情報だけ…しかし実際は4mの津波など…
- 被災状況は後から後からわかってくる
- 仮設住宅の建設の遅れ…
- 我々ができること…有名な、テレビで報道されているところばかりが被災したわけではない!我々はそうではない所にも行ける!
- インフラの復旧が進む場所は前線基地に…七尾は特に
- 奥能登は被害が甚大な地域で、その手前に七尾があり、そこには被災した人をケアする人がいる。そしてその手前にある金沢には、「ケアする人をケアする人」が必要。全

国からも…

- 避難所に集会所ができる→安否確認の場に
- 「イベントはிரない」と言われることもあるが、必要になることもある
- 押し付けてはいけない。「慰問疲れ」もある。せっかく来てもらったし、喜んで見せなきゃ…と。すると、被災者も「また来た…」となってしまう

- ワークショップでは、大きい声を出すと元気になったり、すっきりしたりする
- 発声を教えたり、外で一緒に大きな声で歌おう、など…
- …それもやっぱり、演劇人にとっては大したことがないものだが…

- 被害がディープなところに急に訪れると「何者だ!?!」となる
- もう少し被害が浅いと自衛隊の基地になっていたり…
- 置いてけぼりになる。「こっちには来てくれないのね…」

- 目的が同じであればあるほど、「自分が役に立ちたい!」と思えば思うほど、ギラギラしてくる。軋轢が生まれ、できない事ばかりをあげつらい、言い合いや競争になる…
↓
- 劇場が避難所になっている…
- 支援団体が入ってきて社交場になる→いがみ合いから協力へ
- 「一緒にやろう」の流れもはやい

- 演劇人のネットワークがどんどん大きくなって…メーリングリストがすごいことに
- 10-BOX の向こう側にすごい数の人が…と思うと声を掛けづらかった
- みんなが被災地に行けるわけではない
- ⇔みんなが心配して大きくなっているのは今だからわかる

- 大集団の代表団が来て…何を聞かれたか覚えていない
- 腫れ物に触るような感じ…尋ねてくれない
- ⇔こっちも何をしてもらえないかわからない
- 「俺は本名の俺なのか、芸名の俺なのかわからない…」と言って泣き出す役者…

- 国境なき劇団は…「何かあったときに、お見舞いに行けるような団体」のイメージ
- 「また顔見に来るからね」と、顔の見える関係を大切に…
- 47 都道府県の人と顔見知りになり、お見舞いに行けるように…
- 国境なき劇団は、分散していた方がいい

- 「方言あるところに演劇あり」。洗練されると失われる良さがある
- 東日本大震災からの時の流れ方は一定ではない
- あの時と時間が繋がっている…時間が「刻まれて」いない…数字の時間ではない
- 「あの時」の気持ちが繋がっている…「あの時」は「過去」ではない
- 親しい友人と久々に会っても、まるで前日まで会っていたかのように話し出すような…あの感覚
- 心の現象として…「時間が餅のように伸びる」…

質問：

- 地震後人気 YouTuber の動画を見ていると、コメントで「家が壊れ避難所暮らしだが、いつものように動画が投稿されているのを見て、日常はちゃんとあるんだと思って安心した」とあった。被災後の日常という観点でのお話を伺いたい。

答え：

- 能登の自然、山、日本海…自然に抱かれていた日常生活…
- →日常に戻りたい
- 戻りたいが戻っても隣近所の人がない…日常にならない
- →コミュニティが必要
- 避難生活でコミュニティができた場合、コミュニティごと移住した例も…
- こういったコミュニティを、演劇人は作れる!
- 「日常」にはならない…
- ご近所のコミュニティがなくなることは高齢者にとって致命的
- 仮設住宅…住環境はよくない。一人になれない
- ⇔
- 公営住宅になると…孤独に…「仮設が懐かしい」と思う高齢者たち
- 仮設住宅≠仮の暮らし。いつも暮らしは本物
- あくまで「変化した日常」
- コミュニティの崩壊が、東日本大震災の時も致命的だった
- 文化庁「芸術家の派遣事業」＝アウトリーチ
- 復興のためだけでなく、その後も続けていけたら…
- 市・町以上の行政単位がないと難しい?行政区域を越えて…
- 個人だと行政のプログラムに参加しにくい…
- 上演等のプログラムと、被災者からの要望のマッチングが必要
- 「芸術飛行船」の話

<http://arct.jp/outreach.html>

◎ 他の参加者より

- 子ども主体の発散型のワークショップが好評だった
- 有名人は確かに来てくれるが、「1 年後、3 年後、5 年後、10 年後…あなたはまたここに来てくれますか?」と問う…
- 「私たちは被災者じゃないから…」が既に被災したということ
- 話して、泣いて…の繰り返しで癒されていく
- 地震ごっこで被災経験を消化する子どもたち
- YouTube「共感と同情」